１８	豊田	古瀬間小学校	ウエダ　チカコ 氏名　植田　新子

分科会番号	6	分科会名	生活科教育

地域の方や上級生、友達と関わりながら、
思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子の育成
―　１年　「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」の実践を通して　―

１　主題設定の理由

本学級の子どもたちは、好奇心旺盛な子が多く、たくさんのことに興味をもつことができる。「いきものさがし」の単元では、校内にいる生き物を次々に見付け友達と一緒に捕まえ、虫かごの中に入れて観察をした。他の児童の捕まえてきた虫も楽しんで観察する意欲的な姿が見られた。その後、子どもたちは「飼育したい」と虫のすみかを調べたり、餌を探したりしていたが、そのうち「餌を探すのが大変だし、めんどくさい」「休み時間に他の遊びがやりたくなった」と飼育をやめる児童が増えていった。興味をもつことができても継続せず、すぐに飽きてしまう実態から、本学級の児童に思いや願いを実現するために粘り強く取り組む経験をしてほしいと考えた。

そこで、本単元「日本の遊びに親しもう」で、子どもの「できるようになりたい」「上手になりたい」という思いや願いを引き出し、繰り返し昔遊びと関わることを通して、粘り強く取り組むことの良さや思いや願いを実現する楽しさや喜びを感じてほしいと思い、本研究を進めることにした。

２　めざす子ども像

地域の方や上級生、友達と関わりながら、思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子

３　仮説と手立て

【仮説①】子どもが思いや願いをもつことができる単元構想と、いつでも昔遊びと関わることができる環境を整えれば、学習に対する意欲を持続し、粘り強く学習に取り組むことができるだろう。
【仮説②】友達と関わることで、新しい考えに気付いたり、気付きを深めたりできるだろう。

〈仮説①に対する手立て〉

【手立て①】地域の方（名人）や上級生と関わる活動の設定

昔遊びの道具で楽しそうに遊ぶ姿や、かっこいい技を見ることで児童が「やってみたい」「２年生や名人みたいになりたい」という思いや願いをもったり、上達するためのこつに気付いたり教えてもらったりできる場を設定する。

【手立て②】いつでも昔遊びができるような環境を整える

児童一人一人が思う存分昔遊びと関わることができるように、生活科室をいつでも昔遊びができる場とし、使える道具を十分に用意する。

〈仮説②に対する手立て〉

【手立て③】友達とこつを共有する、パワーアップ会議の設定

児童が新たな考えに気付くきっかけになったり、気付きを深めたりできるように、児童が見付けたこつを共有する場を設ける。

４　抽出児童について

	児童の実態	教師の願い
A児	様々なことに興味をもつことができるが、継続して取り組むことは少ない。また、自信が無いこと、他の児童と比べて自分が上手にできないことには挑戦しようとしなかったり、すぐに諦めてしまったりする。	昔遊びと繰り返し関わることを通して、粘り強く取り組むことの楽しさや良さに気付いたり、自分の思いや願いが実現することの喜びを感じたりしてほしい。

５　単元構想図（次ページ）

5　単元構想（２７時間完了）「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」

【子どもの実態】（〇できていること　▲課題）
〇好奇心旺盛な子が多く、たくさんのことに興味をもつことができる。　〇友達と関わる活動が好き。
▲できないことがあれば諦めてしまう、一つのことに根気強く取り組むことができない子が多い。

〈教科の学び〉

昔のおもちゃには様々な種類や遊び方があることに気付いている。【知・技】

自分の思いや願いの実現のために、聞きたいことを考えている。【思・判・表】

昔遊びの面白さや地域の方と触れ合う楽しさに気付いている。【知・技】

地域の方との交流を楽しもうとしている。【主態】

遊びに対して自分の思いや願いをもち、それを達成するために粘り強く考えたり、工夫したりしている。【思・判・表】

お客さんが楽しめる発表会にしたいという思いをもち、みんなと楽しみながら発表練習をしている。【主態】

振り返りカードをもとに、自分の成長に気付いている。【知・技】

導入

目撃！２年生が昔遊びで楽しそうに遊んでいるよ①②

●昔のおもちゃで遊んでみよう①
・２年生みたいに遊びたい。
・なかなか上手にできないな、２年生に教えてもらいたい！
●２年生に教わりながら昔遊びを楽しもう②
・昔遊びって難しいけど楽しい。
・２年生みたいに上手になりたい。

もっと練習したい！上手になりたい！

展開

昔遊びマスターになろう③～⑰

●昔遊びをマスターしよう③
・なかなか上手にできないな、どうしよう。
・こつを２年生や名人に聞きたいな。
●２年生に教わろう④⑤
・新しいこつが分かったよ。・できる技を増やしたいな。
●名人に教わろう⑴⑥～⑨
・新しい技ができるようになったよ。
・名人のおかげで上手になったよ。
●パワーアップ会議をしながら技を磨こう⑩～⑬
・ひざを使ったらパワーアップしたよ。
・もっと上手になるために、もう一度名人に聞きたいな。
●名人に教わろう⑵⑭～⑰
・こつが分かったよ。　・できる技が増えてきた。

できるようになったことを発表したいな！

まとめ

昔遊びの発表会をしよう⑱～㉗

●発表会の計画を立てよう⑱
・たくさんの人に見てもらいたいよ。
・名人やお家の人を招待しようよ！
●発表会を成功させるために準備をしよう⑲～㉔
・見ている人が楽しめるような発表にしたいな。
●昔遊びの発表会をしよう㉕㉖
・みんな楽しそうにしていたよ。
・名人や家族に「上手になったね」って褒めてもらえて嬉しかった。
●昔遊びマスターになろうの授業を振り返ろう㉗
・たくさんの昔遊びができるようになったよ。
・名人に教えてもらって上手になったよ。

名人にたくさん褒めてもらえて、マスターになれて嬉しかった！
来年は、ぼくたちが次の１年生に教えたいな。

〈教師の支援〉

・単元に入る前に、昔遊びに興味をもつことができるように、昔遊びの道具と名人からの挑戦状を宝箱に入れて生活科室に置いておく。また、昔遊びで楽しそうに遊ぶ上級生の写真を掲示する。

・全ての道具に触れることができるよう、道具を人数分用意し、一人一つ手に取れるようにする。

・２年生や名人に遊び方を聞く際に、どんな遊び方があるのか、自分がどの技までできていて何の技を教えてもらいたいのかが分かるように、技一覧を配付する。

・児童がいつでも名人の動きを確認できるように名人の動画を撮影し、児童の学習用タブレットに配付する。また、自分自身の姿を確認するために、友達に学習用タブレットで動画を撮影してもらってもよいことにする。

・興味をもった遊びを安全上のルールを守っていつでも練習できるように、生活科室を遊ぶ場所として開放する。また、家に持ち帰って練習してもよいことを伝える。

【国語】
地域の方にお礼の手紙を書こう

・自分の成長に気付けるように、蓄積してきた振り返りカードを見ながらできるようになったことを書き出すようにする。

・成長の価値付けができるように、昔遊びマスターの認定証を贈呈する。

【めざす子ども像】
地域の方や上級生、友達と関わりながら、思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子

６　実践と考察

（１）見て見て！２年生すごいね！（手立て①）

【写真１　昔遊びと出会う児童】

９月下旬、きらきらの宝箱を作り、その中に昔遊びの道具と名人からの挑戦状を入れ、好奇心をくすぐる仕掛けを設定し、児童が見付けられるようにした。【写真１】児童が宝箱に気付き、中身を確認すると、「こまだ！」「これ、おばあちゃんの家にある、けん玉だ！」とわくわくした表情で手に取っていた。「子ども園のときにやったことあるよ」と言って遊ぼうとするも、なかなか上手に使えずにいた。それから一週間、宝箱を生活科室に置いた。初めは、多くの児童が道具を手に取り、遊んでみるものの５日も経つとほとんどの児童が興味を失くしていた。

次の週の休み時間、生活科室に入っていく２年生に気付いた児童の「２年生が昔遊びをやっているよ！」という声で、たくさんの児童が覗きに行った。そこには、道具を慣れた手つきで操り、楽しそうに遊ぶ２年生の姿があった。「２年生すごい！」「私もあんな風にやりたい」と本学級の児童も次々と遊び始めた。休み時間が終わると、「２年生がやっていた技をやりたい！」と児童の思いが膨らんでいる様子が見られた。Ａ児も、「２年生みたいにこまを回したい」と自分の思いをもつことができていた。

（２）２年生に教えてもらいたいな（手立て①）（手立て②）

児童の思いや願いを膨らませたところで、単元がスタートした。単元の初めに、全ての道具に触れる時間を作った。その時間の振り返りでは、「やり方が分からない」「２年生みたいに上手になりたい」という意見が出た。Ａ児は、こまを１度だけ回すことができ、「こまは、楽しかった」と振り返りに書いていた。それ以外の道具は、手に取ってすぐに遊ぶのをやめてしまった。理由を聞くと「やり方が分からないし、あやとりはこども園のときに全然できなかったからやりたくない」とこっそり教えてくれた。授業の終わりに、「これからどうしたい」と問うと「２年生に教えてもらいたい」という声が返ってきた。そこで、２年生に教えてもらう時間を２回設けた。【写真２】１回目では、２年生にじっくり教えてもらうことで、「あやとりでゴム管が作れるようになった」「けん玉の持ち方が分かった」等、嬉しそうに話す児童の姿が見られた。Ａ児に声を掛けると「こまは、優しく投げた方がいいんだって！」と２年生に教えてもらったこつを意識して、何度も練習していた。２回目では、子どもたちが何の技を教わりたいのかを具体的に２年生に伝えられるように、活動前に技一覧を配付した。子どもたちは「技のメニュー表」と呼び、「この技を教えてほしい」と指差しながら２年生に願いを伝えることができた。Ａ児も、こまを教えてくれるお兄さんに「『犬の散歩』を教えてほしい」と願いを伝え、２年生に技のこつをじっくり教えてもらい練習することで一人でできるようになった。自分の願いを実現でき、満足そうだった。他の遊びについては、なかなか上達せず、特にあやとりを教わる場面では、２年生に「できているよ！」と言われても、「なんか違う」と言って途中で諦めてやめてしまった。【写真３】

【写真２　２年生との関わり】

【写真３　あやとりを教わるＡ児】

２年生との関わりの中で、こつを見付けた子どもたちは、休み時間にも練習するようになった。そこに２年生も駆けつけてくれた。Ａ児は、２年生の側へ行き、真似をしながら何度もこまの練習をしていた。そこで、２年生が「紐掛け手乗せ」という難しい技を披露してくれた。Ａ児はじっと見た後、真似し始めた。声を掛けると「あの技ができるようになりたい」と迷わず答えた。難しい技を目の当たりにし、Ａ児の中に「もっと上手くなりたい」という気持ちが芽生えているようだった。そこで、２年生が「きれいにこまを回せないと『紐掛け手乗せ』はできないよ」と教えてくれた。Ａ児は、２年生と自分の回したこまを見比べて、「自分のこまはぐらぐら回っている」と気付き、「『紐掛け手乗せ』ができるように、こまをきれいに回せるようになりたい」と具体的な課題をもつことができた。

（３）ぼくたちも名人に教えてもらおうよ！（手立て①）

２年生との関わりの中で、子どもたちはできるようになったことが増えたり、思いが膨らんだりしたが、「もっとできる技を増やしたい」という声が挙がった。すると、ある児童の「２年生は名人に教えてもらったんだって」という言葉に「私たちも教えてもらおうよ」という声が広がった。子どもたちはわくわくした様子で賛同した。そこで、名人に教えてもらう時間を設けた。【写真４】できるようになった

技がさらに増え、子どもたちはとても嬉しそうだった。A児は、こま名人に「きれいにこまを回したい」と思いを伝えると「遠くに投げるようにするといいよ」というアドバイスをもらった。アドバイス通り練習し、安定して回せるようになっていた。活動後、「こまを自分に近付けすぎない」と自分の言葉でこつを書いた。お手玉やけん玉も、練習方法を丁寧に教えてもらうことで感覚を掴んだようだった。A児が一番苦手意識をもっているあやとりについては、教わっている途中で輪から離れたり、うろうろ歩き回ったりして、未だ前向きに練習できていない様子であった。【写真５】

【写真４　名人との関わり】

【写真５　挫けるA児】

活動後、名人の方々に協力していただき「名人動画」を撮影した。撮影した名人動画は、児童の学習用タブレットに配付し、児童がいつでも動きや手順を確認できるようにした。児童は、動画をじっくり見たり、自分のタイミングで止めたりしながら練習をしていた。

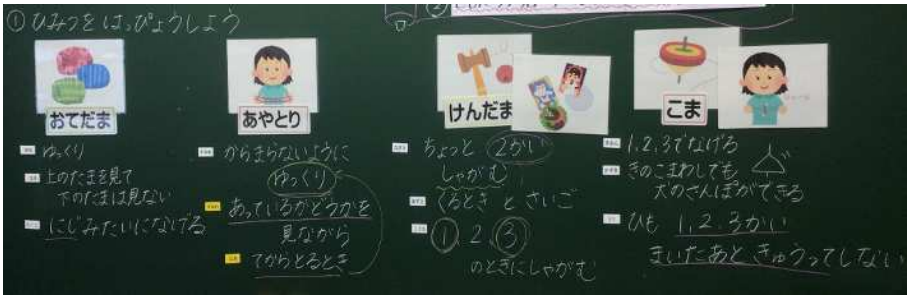
（４）授業だけじゃ時間が足りないよ、もっと練習したい！（手立て②）

活動の中で、「授業の時間が短い！」「もっと練習したい」という声が挙がった。そこで、子どもたちが思う存分昔遊びができるよう、家庭から持ってきた巾着に昔遊びの道具を入れて、自席にかけておくようにした。【写真６】すると、短い時間でも巾着から昔遊びの道具を取り出し、練習するようになった。A児は、長い休み時間に生活科室でこまを練習し、短い休み時間では自席でできるお手玉やぶんぶんごまを練習した。さらに巾着を家に持ち帰って練習し、毎日多くの時間を昔遊びに費やしていた。A児は、休み時間に生活科室で、B児と一緒に「紐掛け手乗せ」を練習するようになった。２人で一緒に練習する内に紐に掛けたこまが指先に触れるようになり、「もう少しで手のひらに乗る！」「頑張ろう！」と２人で喜び合ったり、励まし合ったりして練習を続けていた。

【写真６　巾着】

（５）どうやったら上手くできるか教えて！（手立て③）

休み時間の練習中、こまが回せず泣き出した児童がいた。それに気付いた児童たちが今まで書きためてきたこつを伝えたり、隣でやって見せたりして教えていた。すると、泣いていた児童が一度だけこまを回すことができ、みんなで喜んだ。この出来事を授業の中で紹介し、今まで見付けてきたこつをクラスで発表し合うことで、みんなでパワーアップする、「パワーアップ会議」を開くことにした。子どもたちは会議に向けて、休み時間にたくさん練習し、自分が見付けたとっておきのこつをワークシートに書きためていた。A児は、「２０個もこつを見付けたよ」と見せてくれた。休み時間にも練習することで、子どもの気付きが増えていることを感じた。パワーアップ会議は、全４回行った。会議後の活動では子ども同士で教え合う姿も見られた。しかし、１回目の会議では、A児は友達のこつを試そうとせず、ひたすら自分で練習していた。その時間の振り返りで「○○さんのこつを試したら、できるようになった」と書いていた児童を紹介した。すると、２回目の会議では、他の児童のこつを試すA児の姿が見られた。A児は他児童の「お手玉は、ゆっくり落ち着いて投げる」「下の玉は見ないで、上の玉だけを見て投げる」というこつを試した。会議の中で、実際に手本を見せてもらうことで、A児もイメージができたのか、すぐに吸収し練習し始めた。A児は、連続ではないが 101 回お手玉を投げることができ、とても喜んでいた。その後の休み時間も、「今度は連続 100 回やりたい」とお手玉を練習していた。友達のこつを試すことの良さを感じたA児は、３回目の会議では、「こまは１、２の３で投げる」というこつを試した。すると、こまが上手に回り、「紐掛け手乗せ」に挑戦すると、一瞬手に乗せることができた。A児は、「惜しい！」と言って、夢中になって練習した。４回目のパワーアップ会議では、「こまの紐を巻くときは、１、２、３回こまに巻きつけた後、きゅうってしないで（力を入れずに）巻く」とC児が手本を前で見せながら発表した。C児が巻いた紐がとても綺麗で子どもたちは、「すごい！」と声を挙げてい



【写真７　パワーアップ会議で出たこつ】

た。Ａ児は、Ｃ児のこつを試し、こまを回すと一瞬手に乗せることができ、嬉しそうだった。

（６）一緒に練習しよう！（手立て②）

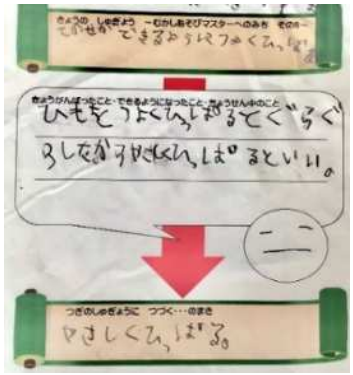
パワーアップ会議後、Ａ児は再びＢ児と練習を始めた。パワーアップ会議では、「こつを言いたくない」と言って発表しなかったＡ児だったが、こつを教え合う良さに気付いたのか、Ｂ児とアドバイスをし合う姿が見られた。【資料８】Ａ児が諦めずにこまを何度も練習していると、そこへ他学年の教員が生活科室へ来て、「紐掛け手乗せ」を披露した。Ａ児はじっと見つめていた。そこで「こまを投げるときにはスピードをつけるように紐を引っ張るといいよ」と教えてもらい、Ａ児はその場で試し、できるようになるまで紐を引っ張りながら綺麗にこまを回す練習を何度も繰り返した。数日後、Ａ児は、初めて３秒間手に乗せることができた。Ａ児も周囲の児童も教師もみんなで喜んだ。Ａ児は、「諦めずに練習して良かった」と涙を浮かべて話した。練習を始めて１か月経った頃だった。「紐掛け手乗せ」を習得したことで自信をもつことができたＡ児は、「練習すればできるはず」と言って、こま以外の遊びにも挑戦し始めた。お手玉も 100 回続けることを達成し、けん玉も「大皿」「中皿」「小皿」「とめけん」「ろうそく」と次々に達成していった。ぶんぶんごまも１分間回し続け、めんこもあっという間にひっくり返すことができた。Ａ児は、自分の思いを次々と実現することができて、とても嬉しそうだった。

Ａ児：Ｂくんは、こまがぐらぐらしてるから、きれいに回すといいんだって。
Ｂ児：きれいに回すって床に刺さるみたいにってこと？
Ａ児：そう！
Ｂ児：（回して見せる）こう？
Ａ児：そうそう！上手い！
Ｂ児：紐は一回、回すとやりやすいよ。
Ａ児：こう？
Ｂ児：そうそう！惜しい！

【資料８　Ａ児とＢ児の会話】

（７）名人やお父さん、お母さんに見て欲しいな（手立て②）

これまで、たくさんの技ができるようになった子どもたちから、できるようになったことを発表したいという声が挙がった。その言葉に、子どもたちはわくわくした様子で、「サーカスみたいにかっこよく発表したい」「お父さん、お母さんに見てほしいな」「教えてくれた名人も招待したい」と賛同した。ここから、昔遊びサーカス団の一員として、また練習に力が入った。Ａ児は「『紐掛け手乗せ』を披露したい」と言った。成功させるために、紐を優しく引っ張ると良いことに気付き、【資料９】紐を引く力加減を調節しながら何度も練習していた。



【資料９　Ａ児の振り返り】

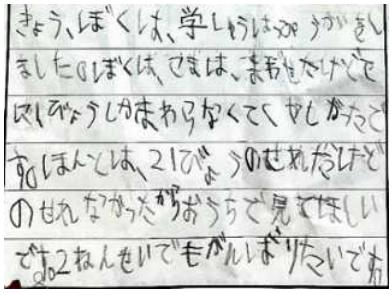
発表会本番、緊張しながらも、Ａ児の「紐掛け手乗せ」は見事に成功した。【写真 10】また、名人にお礼の手紙を渡す場面では、名人の方々が子どもたちの成長と頑張りをたくさん褒めてくださり、「名人に褒められた！」と、とても嬉しそうだった。【写真 11】教室に戻ると、Ａ児は「まだ練習したい」と言った。振り返りを読むと発表会を終えてもさらに「お母さんにもっと手に乗せているところを見てもらいたい」という思いをもっていることが分かる。【資料 12】発表会後もＡ児は、昔遊びに打ち込み、今まで避けていたあやとりにも前向きに取り組んだ。友達に教えてもらったり、名人動画を見返したり、教室にある本を読んだりして、あやとりも次々とできるようになっていき、友達と喜び合っていた。Ａ児は、粘り強く取り組み、思いや願いを実現させてきた経験から、抵抗のあったあやとりにも挑戦することができたのではないかと考える。

【写真 10　発表会当日のＡ児】

【写真 11　名人に手紙を渡す会】

（８）できないと悔しいけれど、できるととっても嬉しいね！

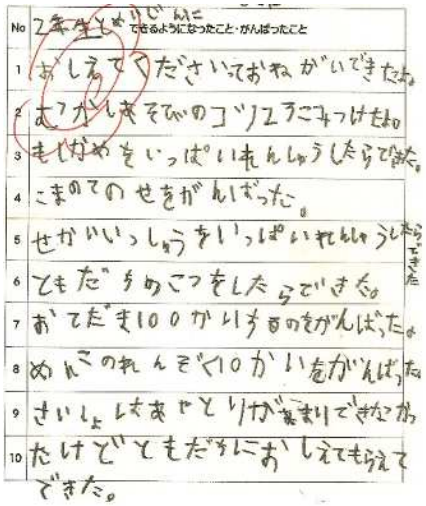
発表会に向けて自分の自慢の技を練習し続けた子どもたちは、発表会後、休み時間に他の技の練習をし始めた。発表会で他の児童の技を見て、刺激を受けたようだった。単元の振り返りを行う際に認定証を渡すことを子どもたちに伝えると、「待って！まだ出来ていない技がある！」「もう少し練習したい！」と張り切って練習していた。Ａ児は、技一覧をじっと見て、けん玉の「もしかめ」と「古瀬間世界一周」という技ができていないことに目を付けた。これらの技は難しく、習得した児童が少ない。Ａ児は、けん玉を持ち練習を始めるが、なかなか成功せず、「この二つができたら、全部クリアになるんだけどなあ」と悔しそ



【資料 12　Ａ児の振り返り】

うに呟いていた。次の日、Ａ児は「世界一周」を習得している児童に「どうしたらできるの」と自分から声を掛けた。Ａ児が自分から教えてほしいと友達に声を掛けたのは初めてだった。声を掛けられたD児は、「玉をたくさん動かすとできないから少しだけ上げるんだよ」とやって見せた。Ａ児は、教えてもらったこつを意識して何度も何度も練習し、これまでできなかった「世界一周」も習得した。「世界一周」をやり遂げた自信が全種目をクリアしたいという気持ちに拍車をかけた。そして、すぐに「もしかめ」の練習を始めた。Ａ児は、またD児に声を掛け、アドバイスをもらっていた。それから一週間、ひたすら練習し続けて、見事成功させ、技一覧に載っている技を全て達成した。Ａ児は、全種目を達成した技一覧を何度も見返し、喜びを隠しきれない様子だった。

単元の振り返り時に、「できるようになったこと・がんばったこと」を１０個、書き出させた。Ａ児は、「いっぱいあるけど１０個ならとっておきのを書きたい」とこれまでのワークシートやこつを書きためた用紙を見ながら、これまでの自分の頑張りを振り返っていた。「できない技もいっぱい練習することでできるようになった」と自分自身の成長に気付いていた。【資料 13】授業の中で子どもたちから「できないときは悔しいけど、できると楽しい」「これからもできないことがあってもできるように練習したい」などという言葉が出てきた。子どもたちは、粘り強く取り組むことの良さや自分の思いや願いを実現することの楽しさや喜びを感じることができたのではないかと感じた。３月、単元の最後に認定証を渡すと子どもたちは、「頑張って良かった」と喜んでいた。また、「まだ、昔遊びで遊びたい！」「今度は僕たちが来年の１年生に教えたい！」と多くの児童が言っていた。



【資料 13　Ａ児の振り返り】

７　成果と課題

（１）成果

【手立て①】地域の方や上級生と関わることで、子どもたちは思いや願いを膨らませることができていた。また、技を目の前で見せてもらったり、隣で見比べたりしてこつを掴むこともできた。さらに、地域の方や上級生との関わりの中で全員一つは技ができるようになり、子どもたちが昔遊びの楽しさに気付き、「もっとできるようになりたい」と思いをもつきっかけとなった。

【手立て②】巾着を用意するまでは、生活科室に行き、順番に並んで箱から道具を取り出したり返したりする時間が必要だったが、昔遊びの道具を巾着に入れて自席に掛けておくことで、短い時間でも道具を取り出し練習することができた。また、巾着に入れて持ち帰ることもできた。生活科室をいつでも昔遊びができる場として開放しておくことで、こまやけん玉など、家や教室ではなかなか思う存分使うことができない物でも、繰り返し練習することができた。道具の確保、場所の設定が児童の学習に対する意欲を持続することに繋がったと考える。

【手立て③】子どもたちがこつを発表し合うことで、新たな気付きが生まれたり、「自分はひざを曲げることには気付いていたけれど、ひざを曲げるタイミングが大事なんだね」と気付きが深まったりした。また、パワーアップ会議後は、休み時間にも子どもたち同士で関わり、アドバイスをし合う姿が見られるようになった。昔遊びを上達させ思いや願いを実現させるためには、友達との関わりが有効であったといえる。

Ａ児の様子から、子どもたちは、粘り強く取り組むことの良さや思いや願いを実現する楽しさや喜びを感じられたと考える。

（２）課題

子どもたちの気付きをより深めるためには、友達と関わる機会やこつを共有する機会をもっと増やせると良かったのではないか。また、今回は単元の中盤でパワーアップ会議を開いたが、上達を早め、より深く昔遊びと関わることができるように、もう少し早いタイミングで会議を開いても良かったのではないかと考える。今後は、児童の実態に合わせて、友達との交流の回数やタイミングを考えていきたい。